

第17回、岡山芹沢文学読書会 内容報告書

■場所：倉敷市庄公民館

■日時：令和6年月16日（日曜日）13時30分～15時30分

■課題：「神の慈愛」第6章

■参加人数 8名

■筆記者：桑田幸真

= 読書会内容 =

- ・第二次世界大戦前後の日本の経済情勢と世界の経済情勢を説明（山本信夫）
- ・6章は先生の娘さんを留学した時の苦勞が書いてある。この時、偉大なる神に守られた事を書いている。不可能な事が可能になっている。偉大な力（神）の存在を書かれている。
- ・存命の親様が2度現れた、というのは、「教祖様」を書いた後に枕元に現れているが、先生は、親神の地球救済の本当の意味が分らなかった。
- ・先生が留学した娘さんに、多くの手紙を書いている。本当に凄い事だと思う。
- ・100万フランの小切手を支店長の個人的判断で渡されたというのは時代を物語っている。通常であれば、支店長の権限で小切手を渡すことは考えられない。
- ・先生は喘息で苦しまれたが、この「喘息」が神の慈愛だった。喘息によって、先生は神に向き合うことができた。この事を、親様が先生に教えている。私達は、人間として神に助けられたと思っているが、人間の希望とは違ったの神の心があると思った。
- ・フランスの文化として、芸術を重んじる側面がある。このため、文学者が尊敬されて、銀行の支店長は小切手を渡したのではないか。
- ・フランスは芸術の都パリと呼ばれているが、これはナポレオンのフランス革命に関係しているのではないか。

・6章を読んで感じたことは、神様に喜んで頂ける事をしていたら、神様からご褒美を頂けるのではないかと思う。芹沢先生は、大きなお仕事をされたが、私達にも神様は働かれると思う。

・この神シリーズは、木と老人が語るという、所謂おとぎ話のような物語から始まって、「神」の偉大さを書いているが、この章は、「神」から少し離れて、一休みかと思っただが、後半は神について書かれている。

・光治良先生の女性に対する理想は高い。奥様は30年たって、やっと理想に近づいた。金江さんのお母さまは、多くの妾の子を育てられた。苦勞をされた方だ。慈悲観音と呼ばれていた。

・6章を読んでいると、神の助けを何度も感じた。私たちもその分、頑張らないといけない。

所感：この章では、神の助けについて、具体的にその例を挙げて書かれている。また、芹沢文子先生と芹沢玲子先生について書かれていることから、芹沢家の内部事情についての話題が多く出たが、その本質については不明確な為、報告においては割愛した。

印象的であったのは、光治良先生が、伊藤青年を通じた親様のお話を聞いて、初めて「神の働きと計画」について認識され、「申し訳ないことだ」と書かれている。この部分は、全く、先生らしい高潔さだと思う。芹沢文学を読み進める上で、私たちは人間としての理想を考える事が必要となるだろう。

以上